

# 中國佛教々團の制度並に儀禮に關する

## 諸文獻の考察（其の一）

今 津 洪 嶽

### 小 序

本考察は、目下着々その研究を整備しつつある「中國禪宗僧團の制度並に儀禮の研究」の序説の一部を爲すもので、趣旨とするところは、廣く中國に於ける佛教教團の制度、並に儀禮に關する全般に渉る諸文獻の成立に對する概觀を試みるとともに、特に禪宗僧團に於けるそれ等の諸文獻の成立一般を考察せんとするに存する。自分の「中國禪宗僧團の制度並に儀禮の研究」に對し、文部省が特に研究助成金を下附せられたことは、老學究の衷心感謝に堪へざることたるとともに、その責任の重且つ大なることを痛感して居る次第であつて、日夜精進怠らず、その完成を期しつつあることを附言して置きたいと思ふ。

### 一 中國佛教教團の制度並に儀禮に關する諸文獻成立の史的考察

中國佛教史上、僧尼の日常修道生活に關する一般規範の制定は、印手菩薩釋道安<sup>三八五</sup>が僧尼軌範並に法門清式<sup>二</sup>十四條を制定せしを以て嚆矢とする。即ち宋祖琇の隆興編年通論第三及び明覺岸の釋氏稽古略第二に「著僧尼規範及法門清式二十四條世遵行之」と傳ふるもので、僧尼規範は慧皎の高僧傳第五釋道安の條<sup>並に四分律行事鈔卷上四</sup>に、「安

既德爲<sub>二</sub>物宗<sub>一</sub>、學兼<sub>三</sub>三藏<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>制僧尼軌範佛法憲章、條爲<sub>三</sub>三例<sub>一</sub>、一日行香定座上講經上講之法。二曰當日六時行道飲食唱時法。三曰布薩差使悔過等法。天下寺舍遂則而從<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>と見へてその内容一斑を推知することが出来るが、法門清式二十四條に就ては、何等文獻の徵すべきものを存しない。僧尼規範は、天下の寺舍遂に則としてこれに従ふと云ふから、當時に於ける中華の寺院一般が、僧尼の修道規範としてこれを依用せることを知るべく、後世に成立せる禪宗僧團の修道規範たる各種の清規の内容と比較考察して、その影響の大なるものありしとともに、その後世に及ぼした影響も又極めて大なるものありしを思はしめる。

唐南山大師道宣の四分律刪繁補闕行事鈔卷上四說戒正儀篇第十を検すると、「普照沙門、道安開士、撰<sub>二</sub>出家布薩法<sub>一</sub>、並行<sub>二</sub>於世<sub>一</sub>」と見へる。道安の出家布薩法は、前に擧げた僧尼規範三條の中の第三布薩差使悔過等の法といふを指したもので、唐代には、これが別行されて居たものであらう。普照沙門の紀傳行履は明瞭でない。宋・元照律師の行事鈔資持記には、「普照、指皈云、遍尋<sub>二</sub>傳記<sub>一</sub>、詢<sub>二</sub>訪名公<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>何代人<sub>一</sub>」と註して、宋代既に普照の傳記を佚失して居たことが知らるる。

西明寺圓照の大唐内典錄第四に依ると、齊・武帝の永明七年四八九沙門超度なるものが律に依つて律例七卷を撰出し、梁武帝の天監三年五〇四に、楊州の沙門僧盛が、鍾山靈根寺に於て、律に依つて教戒比丘尼法一卷を撰出せることと見へる。後者は出三藏記集第二、歷代三寶記第三、第十一等にも見へ、前者は歷代三寶記第十一に見へて、これ等は並に當代の教團に相當なる影響を與へたことと思はれる。

僧尼の布薩法に對して、優婆塞優婆夷の布薩法、即ち在家布薩法を制定したのは、竟陵王文宣王四六〇である。

行事鈔に「昔齊文宣王撰<sub>二</sub>在家布薩法<sub>一</sub>」と見へ、同じく道宣の別著たる四分律刪補隨機羯磨疏第四上には、「布薩者秦言<sub>二</sub>淨住<sub>一</sub>、義云<sub>二</sub>長養<sub>一</sub>、竟陵文宣王、撰<sub>二</sub>淨住子二十卷<sub>一</sub>」と見へる。出三藏記集第十二齊太宰竟陵王文宣王法集錄序に依ると、文宣王には、淨住子二十卷の外、同種の撰著と思はれるものに、布薩並天保講一卷、清信士女法集三卷、

述生東宮齋述受戒共卷、僧得施三業施食法共卷、教宣約受戒人一卷等の撰著があるが、行事鈔に在家布薩法といふは恐くは布薩並天保講を指すであらう。資持記の著者元照律師は、「齊即南齊蕭子良、生封竟陵王、死諡文宣王、在家布薩者、或五卷八卷、或云菩薩戒。其文已亡不可尋矣或云即淨住子二十卷也」と註するが、割註に「淨住子二十卷也」といふは、羯磨疏に布薩の語義を釋し、秦に淨住と云ふの譯例として淨住子を擧げたもので、これが直に在家布薩法そのものとは斷せられないであらう。布薩は出家在家の四衆に通し、從つて僧尼の規範としての中の出家の布薩法にも、在家の布薩法にも通するからのである。淨住子二十卷は、恐くはこの兩者に通するものであつたであらう。もつとも、その中の在家布薩法のみを、道宣律師が、特に在家布薩法として、取り上げたものと解すれば、その意味は通することゝ考へる。

四分律宗の祖南山大師道宣五九六一六六七の四分律に關する幾多の高著を初め、教誡新學比丘行護律儀、淨心誠觀法、釋門皈敬儀、釋門章服儀、六時禮佛懺悔儀、關中創立戒壇圖經、釋門集僧軌度圖經各一卷等が、當時の教界はもとより、後代の教團に及ぼした影響は、頗る大なるものもあり、淨心誠觀、皈敬儀、章服儀等は、宋代に入り、彥起、了然、允堪、元照等の諸德に依りて、廣く敷演流布されて居る。

贊寧の宋・高僧傳第一、唐京兆大興善寺不空傳を檢すると、大廣智不空三藏七〇五七七四は、唐代宗の大曆九年、「自春抵夏、宣揚妙法、誡勅門人、每語及普賢願行出生無邊法門經。勸令誦持、再三歎息、其先受法者、偏令屬意觀。菩提心本尊大印。直詮阿字了法不生證、大覺身、若指諸掌、種々囑累。一夜命弟子趙遷持筆視來。吾略出涅槃茶毘儀軌以貽後代。使準此送終。遷稽首三請、幸乞慈悲久住、不然衆生何所依乎。空笑而已、俄而示疾」云と見へる、不空は此年六月十五日、香水を以て澡沐し、東首偃臥、北面にして闕庭を瞻望し、寂然として入滅した。即ち不空三藏に涅槃茶毘儀軌の遺著がある。隆興編年通論第十八にも、「不空三藏、令弟子趙遷執筆、授所撰涅槃軌範、以貽後世、使準此送終」と見へる。趙遷は即ち大唐故大德贈司空大辨正廣智不空三藏行狀一卷

の撰者、前試左領軍衛兵曹參軍翰林待詔趙遷で、不空三藏の在俗の弟子である。宋高僧傳の記事は、この行狀中に見へて、僧傳の編者贊寧は行狀に基いて立傳したものである。教團に於ける涅槃茶毘の軌範に、影響するところ多きは容易に推知し得ることであらう。

これより先き、唐高宗の永隆二年<sup>六八〇</sup>（一說龍朔二年寂六六二）示寂せる長安の光明寺善導は、その五部九卷の遺著中に、轉經行道願往生淨土法事讚二卷、往生禮讚偈一卷、依觀經等明般舟三昧行道往生讚一卷、觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門一卷、總じて四部五卷の撰著がある。これ等は何れも所謂行儀門の述作に屬し、願生行者の平生並に臨命終時の修道規範を定めたもので、記主禪師良忠の法事讚私記卷上には、五部九卷の中、觀無量壽經疏一部四卷は、經の文義を解し、餘の四部五卷は、その行儀を明かす。四部の中、その前後は定め難きも、暫く五種正行の次第に依りて、その前後を判せば、法事讚は讀誦正行、阿彌陀經を讀誦するが故に先づ集むべし。觀念法門は觀察正行、觀佛等を明す故に次に明すべし。往生禮讚は禮拜正行、禮の儀則を明すが故に次に集むべし。般舟讚は讚嘆供養正行、讚嘆の行を明すが故に後に撰すべし。これ先師鎮西聖光の口傳に依ると解し、往生禮讚私記卷上には、觀經疏は教門なり、餘の四部は行門なり。行門の中、禮讚は禮拜と讚嘆との二種の正行なり。法事讚は讀誦と讚嘆と供養との三種の正行なり。觀念法門は觀と稱との二行なり、般舟讚は讚嘆正行なりと註して居る。かくて觀念法門は、依經明觀佛三昧法<sup>一</sup>、依般舟經明念佛三昧法<sup>二</sup>、依經明入道場念佛三昧法<sup>三</sup>、依經明道場內懺悔發願法<sup>四</sup>の四段に涉りて、以て願生行者の實踐修道に資し、往生禮讚には、無量壽經並に龍樹、天親、彥琮等の諸徳の禮讚偈に依りて、晝夜六時の禮讚の規範を定むる等、法事讚流通分に「白行者等、一切時常依此法爲恒式」と附嘱せる如く、永く西方行者の修道實踐の規範たることを期した。これが爾後に於ける日華兩國の淨土教徒の修道規範となつたことは、改めて説明するまでもなく、特に偏依善導一師と標榜して立教開宗せられた我が國の淨土教徒の實踐規範として、今日尙ほ根本方軌となつて居ることは、何人も知るところである。

同種類のもので華嚴教學の系統に屬するものに、唐・宗密<sup>七八〇</sup>の圓覺經道場修證儀十八卷、同禮懺略本四卷、同道場六特禮一卷がある。圓覺經道場略本修證儀一卷の著者、宋・淨源<sup>一〇八八</sup>は、この系統に屬したもので、淨源に別に、華嚴普賢行願修證儀一卷、首楞嚴壇場修證儀一卷の作がある。明・禪修の依楞嚴究竟事懺二卷も、また指摘さるべきであらう。

菩薩戒儀に關するものは、中華天台の第二祖南岳大師慧思<sup>五一五</sup>に受菩薩戒儀一卷がある。高祖天台智者大師智顗<sup>五三八</sup>に、菩薩戒義疏二卷の高著あり、六祖妙樂大師堪然<sup>七八一</sup>に授菩薩戒儀一卷の作がある。爾後の教界に及ぼしたる影響の眞に大なるものあることは、改めて説明を要しない。天台の修習正觀坐禪法要一卷が、華嚴、禪その他教團一般の坐禪修道の規範となりしは、言を俟たず、方等三昧行法、法華三昧懺儀、觀心食法、觀心誦經法、般舟行法、金光明懺法各一卷の何れもが、教團の修道生活に與へたる影響の廣且つ大なるものもあるが見のがしてはならぬ。荊溪大師の方等懺補助儀二卷、法華三昧補助儀一卷、並に唐・澄照の略授三皈五八戒並菩薩戒一卷の作も指摘さるべきである。宋代に入りて、受戒に關するものに、延壽の受菩薩戒法一卷、遵式<sup>五九七</sup>の授菩薩戒儀、受五戒法各一卷、元照<sup>一〇四八</sup>の授大乘菩薩儀一卷の作がある。比丘の章服に關するものとして、遵式の三衣辨惑論一卷、允堪<sup>一一六</sup>の衣鉢名義章一卷、元照の道具賦、佛制比丘六物圖各一卷、妙生の佛制六物圖辯訛、三衣顯正圖各一卷も佚してはならぬであらう。

各種の修懺その他に關するものは、宋・知禮に千手千眼大悲心呪行法一卷の作あり。明・智旭<sup>一五九</sup>は占察善惡業報經行法、讚禮地藏菩薩懺儀各一卷を著はして居る。佛祖の報恩禮懺に關するものには、宋・仁岳<sup>一〇六四</sup>に、釋迦如來降生禮讚文、同涅槃禮讚文各一卷あり、遵式は智者大師齋忌禮讚文一卷を、孤山智圓<sup>九七六</sup>は南山祖師禮讚文一卷、仁岳並に允堪<sup>一一六</sup>に各、同一の作あり、則安は大智律師禮讚文を著して居る。

水陸會は、梁武帝の天監四年二月、金山寺の水陸會を以て始修とせられる。宋・神宗の熙寧中、東川楊鏐なるもの

梁武の舊儀を祖述し、又儀文三卷を撰して蜀中に行い、尋いで哲宗の元祐八年十一月、蘇軾は亡妻末氏の爲に水陸道場を設けてこれ供養し、又水陸法贊十六篇を製して眉山水陸と稱したと傳へられるが、儀軌を撰述したのは、佛祖統記の著者志磐の法界凡聖水陸勝會修齋儀軌六卷を以て嚆矢とする。略稱して水陸修齋儀軌といひ、明代に入りて、雲棲株宏一五三二—一六二二に依りて重訂せられて居る。孟蘭盆齋は、梁武帝の大同四年、同泰寺に於て設けられたるを始修とせられ、初唐代には廣く官民の間に行はれたるは、法苑珠林第六十二の記載に依りて知られるが、孟蘭盆經の註疏としては、華嚴宗密の孟蘭盆經疏二卷を以て最初のものとする。宋・元照が新記を添へて居る。普觀、可觀、遇榮、日新等に疏鈔の撰あり。明・智旭も新記一卷を著して居る。

以上斯くして中國の佛教々團は、次第にその制度を整備し、儀禮行事も又整備せられるに至つたが、禪宗僧團の所謂清規式のもの、元晋宗の泰定二年一三二五四明演忠律師の沙門省悟心源に依る律苑事規十卷を以て始とする。序中に「百丈大智禪師、採取律制以爲禪林清規、學世盛行、而吾家律學者反不及焉」云々と見へ、序は泰定二年中元前五日の作に係り、前年中元日に哀柄なるものが跋文を撰して居る。隨處に式威の禪林備用清規十卷を依用して居ることは、指摘さるべきであらう。次で順宗の至正七年一三四七天然大圓覺教寺の住持自慶の增修教苑清規二卷成る。天然靈山教寺の沙門大安、靈石山の登善菴主張雨及び金華の黃潛の三序が添へられて居る。この清規が専ら收修百丈清規に依り、それを範として居ることは注意さるべきであらう。

以上は中國に於ける佛教僧團一般の制度並に儀禮に關する諸文獻成立の極めたる概觀的考察であるが、自分はこれを背景として、特に禪宗僧團のそれに對する考察を試みたいと思ふ。